

低身長児の心理的問題

(分担研究：内分泌疾患の生活管理・指導に関する研究)

横谷 進 大賀達雄

要約：低身長を主訴に来院した小児を対象にアンケート調査を行った。身長が $-2SD$ 以上の正常範囲の小児に比べて、 $-2SD$ 未満の客観的低身長児では、中高校生になると低身長を恥ずかしいと思ひ、困っていると答えた者が多く、低身長を将来の心配とする者も多かった。「障害を持っている」「孤立している」とする自己評価の傾向も目立った。一方、学校を楽しいと答えた者が大部分で、学校への過剰適応が推測された。以上より、明らかな低身長児では、親や周囲からの保護がなくなる中学生以降に心理的歪みや葛藤が顕在化しやすいと推測された。

見出し語：低身長、心理的問題、いじめ、自己評価、社会適応、期待身長

[はじめに]

一般小児科外来において、また、とくに小児内分泌外来において、低身長を主訴として来院する小児は稀ではない。その中の多くは、身長を伸ばしたいという強い希望を持っており、時には低身長のために精神的に挫折して、人格形成に大切な時期を学校や社会から孤立しながら過ごしている生徒に出会うこともある。

低身長児の心理的問題については、成長ホルモン分泌不全性低身長症（下垂体性小人症）を中心として多くの報告が見られ、低い自己評価、未熟な社会性、ひきこもり、社会的孤立などの心理的特性が指摘されている¹⁾²⁾。しかし、本邦におけるその方面での研究は、一部の研究者のみに負っており³⁾⁴⁾⁵⁾、まだその蓄積は乏しい。

今回私たちは、虎の門病院小児内分泌外来を低身長を主訴に受診した患児にアンケート調査を行い、とくに、(1) 低身長の程度と心理的歪みの関連性 (2) 身長期待度の高さと現在の社会適応との関連性、について分析したので報告する。

[対象者及び方法]

1991年3月より1992年7月の間に、本人または親の希望により低身長を主訴として、虎の門病院小児科外来を初診した患児198名にアンケートを送付し、回収した83件（回収率42%）の中から学期の59件を分析の対象とした。内訳は、小学生21名（男子13名、女子8名）、中学生22名（男子13名、女子9名）、高校生13名（男子6名、女子7名）であった。病名の内訳は、体質性低身長41名、成長ホルモン分泌不全性低身長症7名、中枢性甲状腺機能低下症2名、その他にターナー症候群、進行性筋ジストロフィー、ヌーナン症候群各1例等であった。

アンケートは29項目で、低身長に対する意識、学校における適応状況、自己評価等からなっている。

[結果]

対象者を実際の身長のSDスコアが -2 未満のものと、 -2 以上のものの2群に分けて比較検討した。前者は客観的にみても低身長なので short stature group (S群と略記)、後者はほとんどが平均身長以下であるが低身長とは判定しがたいので normal stature

group (N群と略記)と呼ぶことにする。身長のSD値は、S群で -2.7 ± 0.58 , N群で -1.3 ± 0.47 であった。内訳は、S群31名(小学生12名, 中学生13名, 高校生6名), N群28名(小学生9名, 中学生12名, 高校生7名)であった。

(1) 低身長と心理的歪みとの関連性

心理的歪みを表すパラメーターとして、低身長に対する気持ち、自己評価、将来の心配、学校における適応状況、いじめをとりあげた。

(低身長に対する気持ち)

背が低いことに対して抱いている気持ちは、全対象者を合計すると、「劣っている」29.7%、「恥ずかしい」19.0%、「かわいい」8.6%、「その他」6.9%、「何とも思わない」44.8%であった。しかし、N群とS群を比較すると差が見られ、N群では、年齢による違いは明らかではなく、どの年齢でも「何とも思わない」割合が最も多い。一方、S群では、年齢によって低身長に対する気持ちは異なっており、小学生では、N群と同程度に「何とも思わない」割合が高いが、年齢とともにこれが少なくなる。逆に「恥ずかしい」と思う割合は年齢とともに増しており、とくに高校生では、「恥ずかしい」と思う人が40%に達している(図1)。

低身長でどの程度困っているかについては、全体では「とても困っている」13.1%、「困るが何とか対処できている」29.5%で約4割が困っている。「得ることがある」は、18.0%であった。2群の比較では、S群が中学生になると困る割合が高くなり6割近くに達し、「とても困る」者が3割いる。一方、N群では「とても困る」ものはほとんどない。「困るが何とか対処している」までを加えた「困る」割合も、N群ではS群より高年齢において低い(図2)。

(自己評価)

「興奮しやすい」～「冷静である」の項目を除いてどの年齢でも両群に共通して自己評価は肯定的なものであった(図3)。

小学生では、親の助けによりアンケートに回答してもらったので、設問の難しさとともに親の意見が混入していると思われる問題もある。しかし、両群とも中学生になると、顕著な傾向ではないが、否定的な評価が見られ始めている。特に、S群では中学生で、「依存的」「劣っているところが多い」高校生では、「消極的」「依存的

とする自己評価の傾向が見られる。

また、両群間で差の顕著なものを見ると、高校生のS群で「障害を持っている」と評価する傾向が「障害を持っていない」とする傾向より強く、また、「まわりとうまくいく」より「孤立している」とする傾向が強かった。

(将来の心配)

将来の心配は、多い順に「背が低いこと」41.1%、「仕事」21.4%、「対人関係」17.9%、「結婚」8.9%であった。両群ともに「背の低いこと」の心配は高いが、S群において、中学生の時期に顕著に高くなっている。一方、N群の方は、中学生以降低身長への心配は減って「仕事」に対する心配が高くなっている。

(学校における適応状況)

学校に行くのは、「とても楽しい」52.5%、「まあ楽しい」28.8%、「楽しいとはいえない」1.7%、「苦痛を感じる」3.4%、「特に何とも思わない」13.6%であった。学校は8割が楽しいと思ひ、全体的によく適応している。しかし、楽しくないものも約5%存在している。

両群を比較すると(図5)、中学生の時期では「とても楽しい」と回答した者の割合に大きな差が見られ、S群の8割近くが「とても楽しい」と回答した。高校生になるとS群の「とても楽しい」割合は減って、両群とも3割前後となり、他方、「苦痛を感じる」ものが現われている。また、楽しいと感じる理由を見ると、友達をあげるパーセンテージが全体として高いがS群の中学生では、「友達」について「勉強」をあげていることが特徴的である。

(いじめ)

いじめは、4割がまったく経験していないが、残りの6割は何等かの形で経験していた。いじめを受けていた程度は、「いつも」10.5%、「ときどき」22.8%、「たまに」26.3%であった。

いじめの内容で多いものは、「言葉で罵られる」28.2%、「いたづらをされる」15.5%、「暴力を奮われる」15.5%、「おもちゃにされる」15.5%であった。両群を比較するとN群の方は、各時期によって、いじめの内容の変化は少ないが、S群の方は中学生になると「暴力をふるわれる」「いたづらをされる」「おもちゃにされる」など、積極的(肉体的な)いじめが減少して「言葉で罵られる」割合が50%近くに増えるが高校生になると減少する。

(2) 期待身長と現在の社会適応の関連性

現在の社会適応を表すパラメーターとして、学校における適応状況をとりあげ、男女別に身長期待度(将来に期待している最終身長)との関連性をみた(図6)。

男性では標準身長が 170.3 ± 5.65 cmなので、非現実的な期待を持っている者が多いことを示している。特に、小学生にその傾向は顕著である。しかし、学校の適応状況との関連についてみると、中学生で「とても楽しい」と思えない人たちに、身長期待度がやや高い傾向がみられたが、明らかではなかった。

一方、女性では、標準身長が 157.8 ± 5.05 cmなので男子ほどでないにしても非現実的な期待を持っている者が多い。しかし、学校の適応状況との関連性は、みられていない。

[考察]

低身長に対する意識は、両群ともに中学生になると強くなるが、N群が「劣っている」という自己の存在に関わる意識を持つようになるのに比較して、S群では「恥ずかしい」という自己の存在に目が向くというより他人の目を意識するという違いがみられる。

将来の心配を見ると、S群で背が低いことが顕著に高いのに対して、N群では、背の悩みはあるものの仕事への心配が増えており、より現実的な悩みが表われており、S群が背の低さに強いこだわりを示しているのと対照的である。

S群は、また中学生の時期に低身長で困る度合いが高く、対処にとっても困る割合も3割と高い。自己評価も、N群と比較して否定的な感情・依存的・劣っている・を持っており、更に高校生では「障害を持っている」「孤立している」が強く表われている。

このように、S群は否定的な感情が強いが、学校における適応状況は、楽しいと感じる者が多く、中学生では「とても楽しい」者が8割を占めている。この結果は、S群での中学における過剰な適応を推測させる。また、その理由に勉強をあげている者もいて、N群と対照的であった。

最後に、期待身長と社会適応の関連性については、社会適応の状態によって、期待身長が高低する関連性は見られなかった。今回は、社会適応のパラメーターとして学校を楽しんでいるのとらえているのか否かをとりあげたが、

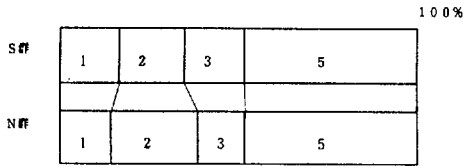
全体に楽しいと答えているものがほとんどであり、詳細な検討は難しい。S群に心理的な歪みが推測できるので、社会適応と期待身長との関連性については、より複雑な要因がからんでいるものと思われる。この心理的な歪みが、どのように社会適応あるいは期待身長に影響を与えるかは、保護者の態度による差異等を含めて、更に検討が必要である。

以上のことより推測できることは、S群は親や周囲の保護がなくなる中学生の時期に、他人に見られた時の自己イメージを強く意識するようになり、学校へ過剰に適応しようとするが、低身長へのこだわりが強く、高校生になると、孤立感を深めていくものと思われる。N群が何とか対処(適応)して、現実的な目標に向かうのと対照的であり、低身長の程度は、心理的な歪み(葛藤)をもたらしやすいと考えられる。

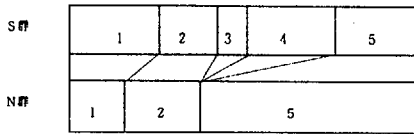
【文献】

- 1) Lee P.D.K. et al. : 小児科クリニックス (Pediatr. Clinics North Am. 日本語版), 8:33, 1987
- 2) Meyer-Bahlburg H.F.L. : in Lifshitz F. ed. : Pediatric Endocrinology. 2nd ed., Marcel Dekker Inc., NY, p173, 1990
- 3) 渡辺裕子: 社会福祉学32(2):156-177, 1991
- 4) 岡田義昭他: 岡田義昭監修: 成長異常疾患ガイドブック, ビーエムエスアイ ジャパン, 大阪, p38, 1992
- 5) 大賀達雄他: ホルモンと臨床, 40:265, 1992

【小学生】



【中学生】



【高校生】

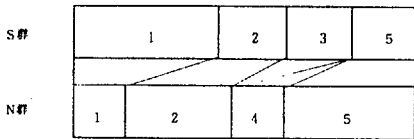
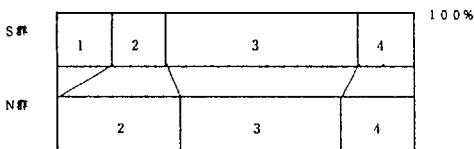


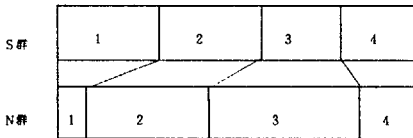
図1 低身長に対する気持ち

- 1 恥ずかしい 2 劣っている
- 3 かわいい 4 その他
- 5 何とも思わない

【小学生】



【中学生】



【高校生】

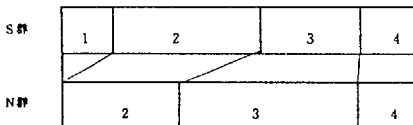
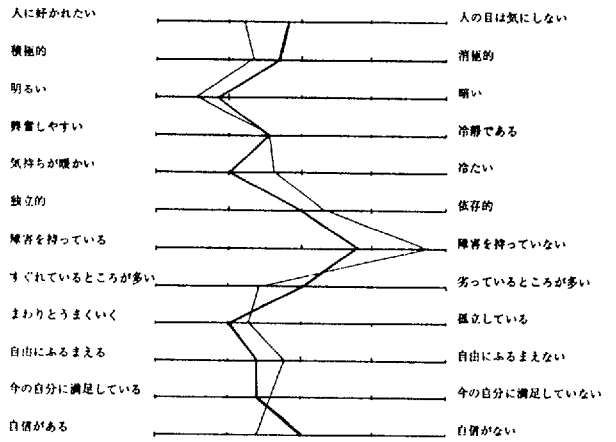


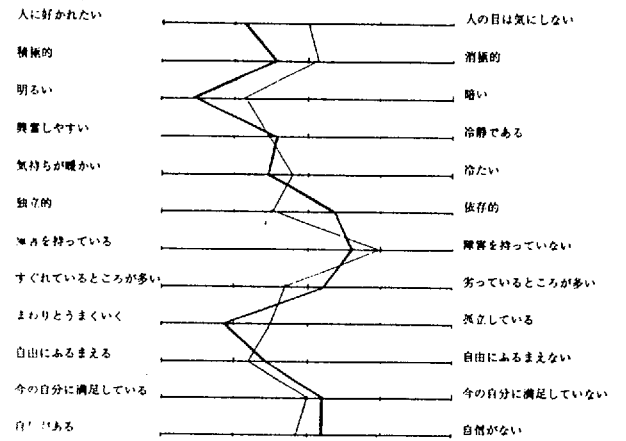
図2 低身長に対する困り具合

- 1 とても困る 2 困るが何とか対処
- 3 特に感じない 4 得することがある

【小学生】



【中学生】



【高校生】

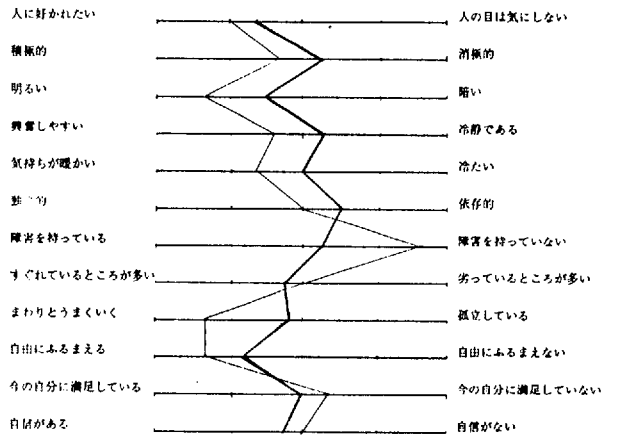
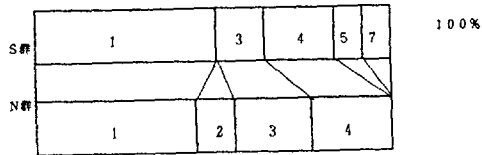
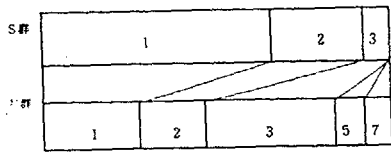


図3 自己評価

【小学生】



【中学生】



【高校生】

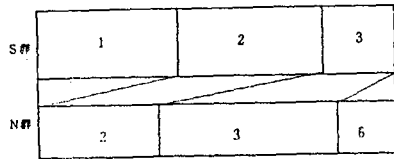
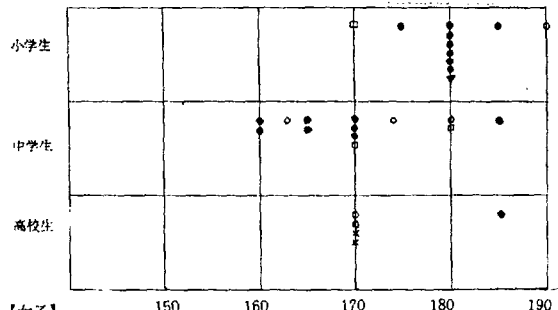


図4 将来の心配

1背の低いこと 2対人関係 3仕事 4結婚
5両親 6兄弟 7その他

【男子】



【女子】

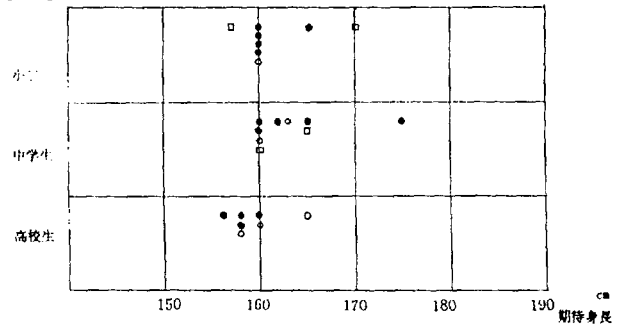
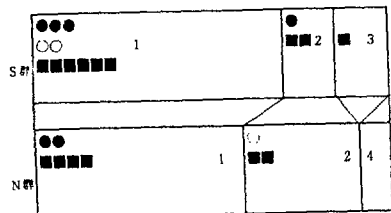
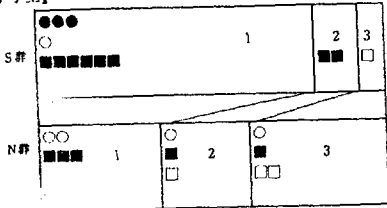


図6 学校の適応と期待身長

【小学生】



【中学生】



【高校生】

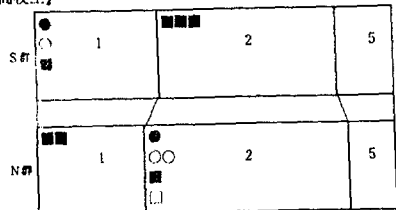


図5 学校における適応状況

1とても楽しい 2まあ楽しい 3特に何とも思わない
△楽しいとはいえない 5苦痛を感じる
●勉強 ○クラブ ■友人 □その他



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:低身長を主訴に来院した小児を対象にアンケート調査を行った。身長が - 2SD 以上の正常範囲の小児に比べて、- 2SD 未満の客観的低身長児では、中高校生になると低身長を恥ずかしいと思い、困っていると答えた者が多く、低身長を将来の心配とする者も多かった。「障害を持っている」「孤立している」とする自己評価の傾向も目立った。一方、学校を楽しんでいると答えた者が大部分で、学校への過剰適応が推測された。以上より、明らかな低身長児では、親や周囲からの保護がなくなる中学生以降に心理的歪みや葛藤が顕在化しやすいと推測された。